

第139回 歌謡曲を彩った 心躍る「前振りナレーション」

私の手元に『ナレーション大全集』（仲村ゆうじ著、マガジンランド、2011年刊）という、文庫サイズながら1000ページ以上に及ぶという分厚い本があります。

10年近く前、カラオケ大会用に準備した1冊ですが、これがなかなかおもしろい。昭和3年発売の『君恋し』以降、演歌中心の歌謡曲と懐メロ、全2230曲を網羅した豪華版です。1曲だけご紹介すると――。

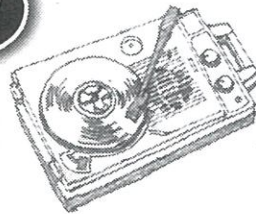
―― 一目逢いたい 逢いたさに
ひとりさまよう 長崎は
今日も悲しく 空が泣く
まるであしたを 隠すよに
なぜに降るのか なみだ雨――

（『長崎は今日も雨だった』より）
基本的に「七五調」で刻まれるリズムカルな「歌の前振り」は、黙阿弥の歌舞伎さえ思わせるような心地良さに酔いつつ、数分間の歌謡物語の世界へといざなわれていきます。
演歌歌手のワンマンショー（この言葉も死語になりかけていますね）や、歌を聞かせることが目的だった大衆

歌謡番組では、司会者によるこの手の「ご案内語り」が前奏にかぶさり、一呼吸置いてから「さあ、歌って

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも



堀井六郎
絵・松本 浦

ただきましよう。『長崎は今日も雨だった』！』というのがオーソドックスな曲目紹介スタイルでした。漫談家の宮尾たか志、綾小路きみまろなどのなめらかな口調には、歌謡ショーの司会で培った話術がにじみ出ていました。

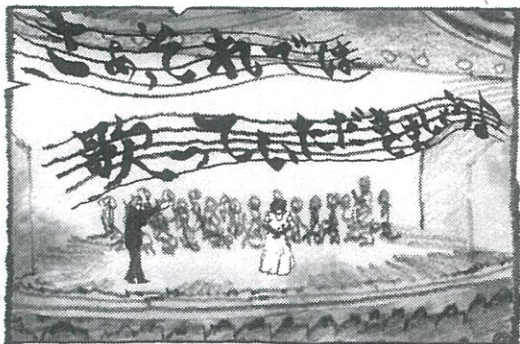
台詞入り歌謡の「台詞や語り」も歌謡ショーにおける司会者の「前振り」も、歌われる歌詞に物語が内包されていてこそ、聴く者をその世界に引き込む効果が発揮されます。平成以降の歌番組で流れる、自らを奮させるJ-POPや多人数で歌われるダンス中心の楽曲には、台詞もナレーションも似合いません。物語性の欠如した歌には不向きな「前振り」の消滅は、文化としての大衆歌謡が変質してしまったことを教えてくれています。

テレビ東京がまだ東京12チャンネルと称していた昭和53年に始まり、やがて局の看板番組になった『演歌の花道』が今、BSテレビ東で復活しています。以前同様、スタジオ内にも設えられたセットにも

制作側の思いがこもり、3分ほどの歌謡物語に彩りを添えています。放送作家の曾我部博士が創作したであろう番組冒頭のナレーションも甦りました。

―― 浮世舞台の花道は 表もあれば裏もある 花と咲く身に歌あれば 咲かぬ花にも唄ひとつ（中略）
なぜか身に染む 心歌――

声の主は、すでに泉下に入った来宮良子。古くは米国テレビドラマ『アニー』をとれ』のアニー役の吹き替え、日テレ『いつみても波瀾万丈』のナレーションもこの人でした。一方、昭和52年から放送が始まったNHKラジオ『にっぽんのメロデー』では、当マイクロフォンこと



中西龍が毎回こう語りかけていました。
「歌に思い出が寄り添い、思い出に歌は語りかけ、そのようにして歳月は静かに流れていきます」。こうした名文句が聞かれなくなったなあ、と気づいたとき、唇からもれる歌の数が増えていないことにも気づきました。